通信第八十四号　（）

私はある人に「如来様との対話をしたら」と要求したことがあります。ところが「そういうお前はどうだ」という声なき声がしました。そこで、（念仏者）の同行さんの詩を筆ペンで書写してみました。才市さんはひらがなも間違えるほどの人ですが本物の念仏者です。禅宗の先生がに紹介されて有名となりました。おびただしい数の詩がノートに書かれています。

書写させていただいた瞬間に、「念仏は如来様との生きた対話」と直感させられました。如来さまは形がないからといって、遠くにおられるのでない。におられる。うれしくなりフェイスブックの掲示板に投稿させて頂きました。

南無阿弥陀仏は

　　如来様、魂の親様との

　　生きた対話でした

　すぐに東大阪市のハニル教会の牧師さん申　英子（シン・ヨンジャ）先生が反応して下さい

ました。申先生は昨年の九月にお遇いした方です。ニューヨークの先生のリモートが

ご縁で去年の九月十二日お訪ねしました。「仕事の関係で何人ものお坊さんとお会いしてきまし

たが私の前でお念仏する人は初めてです」と喜んで下さったのが印象的でした。私も宗派を超

えて心が通じあい嬉しかったです。申先生はアーメン、私は南無阿弥陀仏。違和感がありませ

ん。もちろん異なるところはありますがむしろ共通課題に共感しました。昼食を共にさせて頂

いた時、周りの方々が申先生を尊敬されておられる雰囲気がとても有難かったです。信仰を得

た後の生き方を大切にされている先生です。人類の危機がせまっている今日、宗派を超えた対

話や協力を私は願っています。

大石先生も信後を大切にされました。禅宗ではの修行というそうです。私どもの通常は我

執をよりどころとして生活していますから必然的にすれ違いや衝突が起こります。家庭の中、

仕事場、さらに国と国においても紛争や戦争が絶えません。それぞれに正当性や言い分があり

ます。

「みんながあんたのような考えであればいいけど」と言われることがたまにあります。そうい

う人は聞法するかというとそうでもありません。私自身が大石先生にお遇いするまでは同じよ

うな考えでした。いや、聞法しても帰命となるまでは変わりませんでした。

帰命から法蔵菩薩さまの願いが私の宿業を縁として展開されるということであります。帰命

（帰依）からよりどころが変ってきます。とも申します。聞法される方から次のようにもよくいわれます。

「聞法している時は感動したり、うなずいているのですが家に帰ると聞いたことは忘れて、のです。何の変わりもありません。せいぜい二日、三日香りが残っているくらいで聞法のかいがありません」私も長い間その通りでした。今でも浅ましい煩悩は瞬間々々おこってきます。夢にまで自分の思いもかけない悪性が現れてきます。しかし、そこで暗く沈み込むことは無くなりました。

　起き上がりはいくら傾けても元のところにもどります。仏法の話をしていてもすぐに世間話になる人がほとんどです。ところが世間話をしていてもいつの間にかご信心の世界になる人もまれにいます。信の一念から立脚地が変わるからです。よりどころ、帰る世界が変わるのです。私たちの意識は相対有限の世間におりますから何の疑いもなく世間的価値の世界が身に沁みついています。長い間そこで暮らしてきたから当然のことです。

　　　よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩悩のにそうろうにこそ。なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、力なくして終わる時、彼の土へはまいるべきなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　歎異抄・九章

力なくして終わる時を肉体の死と考えたり、彼の土を肉体が死んでから行くところと解釈している人が少なくありません。それでは信心の世界に入れません。十八願の帰命を焦点とした聞法が大事であります。昔から「の」と言われてきたことです。

先日の聞光道でｗさんが言われました。「知人のお通夜で親しい友人夫妻と会った時、彼いわく『もうあとどれくらい生きるかわからん。元気なうち、認知症にならんうちにせいぜい楽しもう』と、あえて仏教のことは言い返さなかったけど淋しい気がしました。しかし、そう考えている人が多いのではないかと思われます。それだけではむなしいのではないですか」皆さんも私もうなずきました。かつて先生が言われたと大石先生からお聞きした教えを思い出しました。

資本主義は楽しみを与える

　　仏教は落ち着きを与える

社会主義はした国がいくつもありますが、アメリカの資本主義も行き詰まりを現しています。また、民主主義の考えから多数決で何でも決めるあり方もネットが登場して情報に振り回されています。混沌として不安定な世界情勢を多くの方々が感じています。

三楽と言うことが「」に言われています。

　一、・・眼、耳、鼻、舌、身という五官で受け止める楽しみです。

ある面そのために金をもうけたり、仕事をしたり、勉強したりしていることは否定できません。

そこを刺激して経済が回っています。「言われなくても当たり前だ」と言われそうです。

二、・・意識で受け止める楽しみです。

内省したり、考えたり、理解したり、覚えたり。人間としての思いやはからいです。

私はこの意識の延長のところに信心を得られると思い込んで必至で勉強したり、聞法していました。そいうときは生活が空回りし、人間関係がギクシャクしたはずです。念仏を利用して自分を認めてもらおうという浅ましい姿です。

本願のか号（お念仏）をもってオノレガ善根とするゆえに、信を生ずることあたわず、仏智をらず。

聖典３５６頁

「俺はまじめにやっている、念仏申している、信心を頂いている」と思い込んでいたのです。

そんな中で私に如来さまが両親の問題、子供の問題を起こさせました。作った信心、自力の念仏は崩れる必然であったのです。当時はそんなこととはまるっきり思いませんでした。

私は大石先生に深刻な顔をして「信心がれました」と申し上げると、先生は「信心は崩れません。江本さんの作った信心が崩れたのです」と言われました。その時、私はピンときませんでした。それから、家庭の問題はどんどん悪化していきました。父は亡くなり、母は入院しました。母を見舞いに行く私の身は重くやりきれない思いでした。

一番苦手な人が

私のをしらせて下さる

仏様です

　　　　　　　　　　　　　　　　　　大石法夫先生

　私は一番苦手な母のまえに「俺は信心を頂いとらん。念仏も頂いとらん」と手をつかされました。大げさかもしれませんが色々なことを犠牲にし命がけでやって来た伝道活動を全否定された瞬間でありました。涙も出ませんでした。ところが不思議なことに母の口からお念仏が出て下さったのです。今ふりかえると、あの時、私も母も光の中につつまれたのです。本願に帰依させられたのです。仏の智慧をたのむ人生がはじまったのです。いまでも帰らされる世界はそこです。

　三、　・・智慧によって受け止められる楽しみ。この楽は仏の功徳を愛するより起これり。

　すなわち、人間以上の智慧を頂く姿勢の聞法が大事であるということです。そして道を得た人から深く聞きぬいていく姿勢が大事であると私は申し上げたいところです。そうでないと内楽の世界が問題とならず、そこから離れられないからです。よき師が大切であるということです。

よく大石先生は「わかっちゃいけんのよ」とせられましたが、なぜそういわれるのか帰命となるまで私はわかりませんでした。

私においては母が一番苦手な役をしてくれて、私の邪見驕慢悪衆生のの姿を照らして下さったのです。照らして下さったおはたらきが智慧の光明であります。本願であります。本願は光明であります。だから本願が信じられたら明るくなるのは必然です。人間の意識にのぼらないからの広大な無明の闇が晴れるのです。「」という自我の満足ではなく、仏様のご満足の世界です。我執が満足することではなかったのです。弥陀の誓願不思議に助けて頂くところです。だから、大きな安らぎと落ち着きを賜るのです。ごを頂くとも申します。「人間に生まれた甲斐があった。この世界を求めていたのか」と自分でだんだん味わえてきます。そこから日常の生活や生き方が変わって来ます。そこに「帰命」という関門があるのです。

たとえ罪業は深重なりとも、必ず弥陀如来は救いましますべし。これすなわち第十八の念仏往生の誓願の心なり。かくのごとくしてのうえには、寝ても覚めても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり。

あなかしこ（ああ、素晴らしいことである）、あなかしこ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮如上人・御文・聖典八三二頁

この御文様では、決定と帰命が重なっています。帰命となったら必ずご恩報謝の念仏が出て下さいます。

「帰命」、大石先生が一貫してつねづね呼びかけて下さったお言葉です。御和讃にも親鸞さまが「帰命せよ、帰命せよ」とくり返し呼びかけて下さっています。『正信偈』の出だしは「帰命無量寿如来」です。

死んでも下げたくない頭が下がることは思いから言えば死ぬほど嫌なことです。それは自分の人生において奇跡的なことです。しかし、そこから思いもしなかった新しい人生がはじまるのです。お師匠様に阿弥陀如来さまにただただ、ご恩報謝のほかありません。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

　令和七年（２０２５）年３月初旬

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝

　追記、二月二十四日の大分合同新聞に欧州リモート法座の事が掲載されましたので添付させていただきました。